

## 自動化を支える

## ビー・エル・オートテック



ツールチェンジャーについて説明する泉社長

バンドー化学子会社の構造だ。自動車業界などビー・エル・オートテック（神戸市兵庫区、泉社長）は、産業用ロボット向けツールチェンジャーを手がける。国内シェアは二ツタに次ぐ2番手で、小型から大型まで幅広いラインアップを取りそろえる。ロボット市場動向を注視しながら、顧客ニーズに合わせた製品開発を強化する。

ツールチェンジャーは、ロボットの手首の先端に取り付けるツールやハンドを交換するための装置。手首側とツール側のプレートが対になった

構造だ。自動車業界など量産現場のロボット向けでは、高精度・高速の要求に 대응するため、本体の薄型・軽量化が重視される。3月に開催された「2022国際ロボット展」でも、着脱確認センサー内蔵によって薄型化した製品を出展。こうした技術で、用途範囲が広い150kg〜300kgまで可搬ロボット向け製品の品ぞろえを増やしている。

近年は協働ロボット対応も強化。現在、エア供給用の配管が不要で着脱可能な製品を開発中。配管の引き回しを意識しな

# ツール交換装置 協働ロボ照準

くて済むため、無人搬送車（AGV）の上にロボットを載せるなどの組み合わせがやりやすくなる。

泉社長は「これまではロボットを設備の一部として使っていたが、協働ロボットは人の作業の代替。使い方ががらっと変わる」と話す。仮に、セル生産方式の現場で協働ロボットを導入すれば、多種多様なツールが必要となり、ツールチェンジャーの重要性はより高まる。ただこれまで量産現場向けに要求された精度や速度などの性能指標が、必ずしも最重要ではなくなる可能性もある。

今後、顧客ニーズをいかに把握できるかが問われる。

伝動ベルトを手がける親会社と同様、主要顧客は自動車業界。泉社長は「業界が電気自動車（EV）で再編され、既存顧客だけで勝負できなくなった。だがちょうどよく、協働ロボット市場が広がりにある」と分析。協働ロボットを使う化粧品、食品、建設業界など、新分野にどう入り込めるかが注目だ。